

研究課題	<b>電子書籍読み放題サービスを活用した学校図書館教育の充実</b>
副題	～いつでも、どこでも、好きなだけ、本が読める ICT 環境の実現～
キーワード	電子書籍 タブレット Kahoot! (カフート)
学校/団体名	公立 東大阪市立若江小学校
所在地	〒578-0943 大阪府東大阪市若江南町 2-9-54
ホームページ	<a href="https://school.higashiosaka-osk.ed.jp/wakae-e/">https://school.higashiosaka-osk.ed.jp/wakae-e/</a>

## 1. 研究の背景

令和2年度のGIGAスクール構想で配布された子ども1人1台のタブレット端末は、もうそろそろ更新の時期を迎える。果たして、この間の活用の度合いはどうであったろうか。各学校や地域によって活用の度合いは大きな格差があるのではないだろうか。まさにデジタルデバイド（インターネット等の情報通信技術を利用できる者とできない者の間に生じる格差）である。

本研究について指導助言をいただいている奈良佐保短期大学の**上出吉則**教授は、子ども1人1台のタブレット端末について「現代版魔法のランプ」と表現されている。※1

これは、使う人によって最高の学習教具にもなるし、無用の長物にもなるという意味であろう。

本校では、このタブレットを子どもたちの読書活動の推進にも活用しようと試み、今回の実践を始めた。昨今、子どもたちの活字離れがはなはだしい。新聞を購読している家庭の割合は全国でわずか3割弱だそうだ。現在の子供たちは、新聞や本を手にとってじっくり読む時間よりも、おそらくタブレットやスマホで動画鑑賞する時間の方が、圧倒的に長いのが現実だろう。

本校の昨年度（R5年度）の児童の1ヶ月あたりの平均学校図書館貸出冊数はわずかに2.1冊である。子どもたちの読書量を増やすにはどうしたらいいのだろうか？

昨年度の年度末反省会議で、全教職員で話し合い、R6年度は学校総体で読書活動に取り組み、その実践を学校運営の柱に据えようと決めた。

加えて、子どもたちの読書活動推進のために、教職員にも本に親しませるよう努めた。本校の玄関ホールにはPTAから寄贈いただいた本を並べているコーナーがあるが、今回の研究助成で教職員が



校内研修の様子

が読みたい本も多く購入し、朝の読書の時間に子どもたちと一緒に読ませた。読み終わった本はPTA書庫に戻し、多くの教職員で共有した。

しかし、このような実践を進めるにあたって先立つものは、ヒト・モノ・カネである。そこで本校は昨年度末に、大阪府教育庁の「学校図書館の充実・活用に向けたモデル校事業」と、パナソニック教育財団の「実践研究助成」に応募したところ、幸運にも両方とも応募することができた。これによって、蔵書数の少ない本の追加購入の費用や電子書籍についての研究費も獲得でき

たし、図書館司書の毎日配置も実現した。さあ、これで実践の準備が整った、職員室内の先生方の士気もいよいよ高まってきた。

## 2. 研究の目的と成果指標

ところで北海道の国語科教員である石川晋氏はその著書「教室読み聞かせ読書活動 38」※2のなかで、子どもたちの読書活動推進によって期待できる効果として、次の9点を挙げている。

- ① (子どもの) 自己肯定感を高める
- ② (子どもも教師も読書そのものを) 楽しむ
- ③ (子どもたちが) 知識を得る
- ④ (子どもたちの) 人間同士のつながりを深める
- ⑤ (子どもの) 読書意欲を高める
- ⑥ (子どもの) 基礎学力をつける
- ⑦ (教師の) 力量向上につながる
- ⑧ (子どもたちの) 関係性の修復を図ることができる
- ⑨ (子どもが) 自己の物語を獲得できる



本校の読み聞かせ授業の様子

果たして本校の実践が9つの効果のうち幾つに繋がるのか、私は校長として働き方改革を意識し過重労働にならないよう配慮しながら「学校全体で無理のない範囲で、楽しみながら実践を進めよう!」と、全教職員にうったえた。

まずは、本校の現状の調査を始めた。ちなみにR5年度末の学校図書館の蔵書数は9561冊、児童1人あたり19.1冊である。これは文科省の定める「学校図書館図書標準冊数」に約2000冊も足りない冊数である。

また、学校図書館の開館日は週に1日のみ。本市は、司書教諭が週に1日しか配置されていないのである。このままでは学校図書館の貸し出し数の増加は到底のぞめない。「まずは図書館を毎日開館したい」私は、職員会議で強く教職員にうったえた。

併せて、本校の全国学力学習状況調査の国語の平均正答率は、本校は全国平均はおろか、大阪府平均や東大阪市の平均よりも大きく下回っている。子どもたちの読書量の増加による学力向上も、目標のひとつに掲げた。

そして最終的には、本研究実践の成果目標の指標として、次の3つを設定した。

- ・児童アンケートで読書が好きを90%に(現状値58%)
- ・児童のひと月あたりの読書量を4冊に(現状値2.1冊)
- ・市の標準学力調査の5年生国語基礎の平均正答率を70%に(現状値61%)

## 3. 研究の経過

今回の実践の当初は「図書館の蔵書数が少ない分、電子書籍の読み放題パックで読める本を増やせば、子どもの読書量は増えるだろう」と安易に考えていた。しかし5月にパナソニック教育財団の主催するスタートアップセミナーに出席した際、同じように電子書籍の読み放題パック

の活用促進に取り組んでいる名張市立梅が丘小学校の宮部優先生らと同じグループで実践交流をしたりするなかで、指導助言に来ていただいた放送大学の佐藤幸江教授から「ただ読める本が増えただけでは、簡単に読書量が増加するわけではない」との指摘があり、目から鱗が落ちた思いがした。

そして上記の目標達成のための方針として「子どもが本を読みたくくなるようなしかけを作ろう！」と考えた。(ちなみに名張市立梅ヶ丘小学校とは、子どもたちの読書活動推進の取り組みについて、現在も情報交流を続けている。)



東大阪市電子図書館のトップ画面

まず読書意欲促進の1つ目のしかけは、本市の子どもたちのタブレットで手軽に読める「東大阪市電子図書館の読み放題パック」の積極的な活用を強く推奨した。というのも学校図書館の蔵書で人気のある書籍はたいてい貸出中で、返却予約待ちであることが多い。しかし、読み放題パックなら友達と同時に何人でも一緒に読めるし、読後の感想を交流することもできる。蔵書の少ない本校にとって、これを利用しない手はないと考えた。

さらに、読み放題パックの本の中から読書クイズを Kahoot! (カフート) で作成し、毎月替わりで本校の学校 HP に「今月のカフート」のコーナーに掲載した。カフートの読書クイズで優勝しようと、毎月たくさんの子どもたちが電子書籍を読み、クイズに挑戦してくれた。

特に、5年生が国語の授業で宮沢賢治の「注文の多い料理店」を学んだ後には、電子書籍読み放題パックで宮沢賢治の作品集を読む子どもが増え、クイズの参加者も増加した。同様に3年生が国語で「モチモチの木」を学習した後も、同じように電子書籍読み放題パックのクイズに参加する子どもが増えた。さらに6年生は卒業前の学習発表会で国語の授業で学んだ谷川俊太郎の詩を朗読してくれたので、同様の効果が十分期待できる。



謎解きイベントのポスター

次に2つ目のしかけとして、子どもたちが本を読みたくくなるようなイベントを企画した。

本校は今年、創立150周年を迎える。その式典のイベントの1つで「怪人ルークスとレッドストーン」という謎解きイベントを実施し、開催日の前に、謎解き関連の書籍を約30冊追加購入し、図書室に「謎解き本のコーナー」を目立つように新設し子どもたちに宣伝した。

また、今回の研究の指導助言者のひとりである、大阪商業大学の初谷勇教授に校内研修の講師として来ていただいた際には、明治から大正時代に活躍された小説家の宇野浩二氏が、本校の前身である若江村の尋常小学校で代用教員を務めていたことなども

紹介していただいた。もちろんその後、本校の図書室には若江小学校の我々の先輩教員として、宇野浩二先生の著書を蔵書に加えて書架を飾っている。

#### 4. 代表的な実践

##### (1) 実践の工夫

今回の実践の大きな特徴は、春のスタートアップセミナーをふまえて、**年間を通して子どもたちに「紙の本」と「電子書籍」の両方の読書を全学級で奨励した**ことである。

これは、子どもの読書量を増やすために、紙の本も電子書籍も両方の読書量が増えることで、相乗効果で読書量が増えることを狙ったものである。

##### (2) 実践の内容

まず4月当初に、全教職員で本年度の重点目標として「学校図書館を充実活用する授業づくり」を確認した。

また学校HPでKahoot!(カフート)を使った電子書籍用見放題パックの本のクイズを、毎月替わりで発信した。と言うのも、これまで本校はカフートについてはGIGAスクール構想での子ども1人に1台のタブレット配付が始まったと同時にスタートさせた実績がある。※3

今までも算数や国語、特別活動などで全学級で先進的に進めてきた経緯があるので、その勢いを借りて「東大阪電子図書館読み放題パック」の本もカフートでクイズ作成したところ、子どもと保護者が家庭で一緒にクイズを楽しむなど、大きな反響があった。

さらに校内研究授業についても、5月に4年生で虫の図鑑を活用した研究授業を実施し、6月にも1,3,5年生で図書館を活用した授業を実践した。図書館から借りた本を読み、グループでまとめたり発表したりした。授業のしめくりにはKahoot!のクイズを行ったクラスもあった。さらにこの校内研究授業のまとめには、府教委や市教委の指導主事や、学識経験者から助言をいただき、実践の方向性を示唆いただいた。

加えて夏休みには、奈良佐保短期大学の上出吉則教授に来校いただき、タブレットを活用したプログラミングを通して言語能力育成の教職員研修を実施した。

続いて2学期も数多くの研究授業や公開授業を実施した。まずは10月9日(水)に6年生で図書館を使った研究授業を実施し、続く10月23日(水)には大阪府公立小学校算数教育研究会中河



若江小ではおなじみのカフートを使った授業



公開授業の案内チラシ

内大会において、4年生でSDGsに関する電子書籍や紙の本から調べたごみの量の増減について折れ線グラフを読み取る算数の授業を公開した。さらには、11月27日(水)に支援学級も含めた全学年で、図書館を活用した府内教職員向けの公開授業を実施した。当日は、近畿大学短期大学部の川原亜希世准教授の講演もあり、市内の教職員や図書館司書の先生に加えて、大阪府教育庁や東大阪市教育委員会の指導主事の先生方も多く見学に来られた。

3学期に入り、今年の研究実践の年度末反省を行い、研究スタッフが協働で成果報告書を作成した。もちろん、R7年度も本実践を継続する予定ことを視野に入れている。

本実践のねらいの1つに「児童の学力向上」がある。その学力のものさしの1つである全国学テの平均正答率で、何とか次年度は今回の読書活動の推進で、好ましい結果を残したいと思う。まずは、本校の平均正答率が東大阪市平均を上回り、続いて大阪府平均や全国平均を上回りたい、と考えている。

今回の取り組みを進めていくうちに「子どもたちが教室の内外で本に親しむ風景が日常的に見られるようになった!」と感じることがしばしばあった。

ちなみにこれまで本校の「朝の読書」の時間は、紙の書籍が中心であったが、東大阪市電子図書館読み放題パックの奨励を始めてからは自分のタブレットで電子書籍を読む子どもも増えてきた。特に「電子書籍読み放題パック」は、いつでも何人でも同じ本が読めるため、クラス全員で一斉に読む場面もあった。



本校の読書風景  
(紙の本と電子書籍が半々)

また教員がKahoot!の「割り当て」として毎月替わりで東大阪市電子図書館の読み放題パックの本から出題したクイズは、全学年で(保護者も巻き込んで)意欲的に取り組んでいた。学校HPのアクセス数も右肩上がりになった。カフートの問題作成やHPの更新についても、昨年度は1人の教員で担当していたが、本年度は複数の教員で役割分担しながら担当し、組織的に進めることができた。

このカフートの実践については、校長自らが大阪教育大天王寺キャンパスで2月に開催された天遊第16回研究発表会に参加し、自作の読書クイズを子どもたちがタブレットで楽しみながら電子書籍も紙の本も両方の読書量が増加した様子を報告し、大きな反響を得た。

さらに、本年度の本校の創立150周年記念イベントのひとつとして企画した「怪人ルークスとレッドストーン」の開催については、実施前に図書室に「謎解きの本の特設コーナー」を設置したとたん、子どもたちは大喜びで謎解きの本に飛びついていった。イベント当日は、子どもたちと一緒に保護者や地域の方々も参加されていたので、親子で学校内を散策しながら「謎解き」を楽しんでもらった。もちろん、子どもたちが保護者と学校内を歩き回りながら謎を解くとき、す

で謎解き本を多く読んで謎解きについて鍛えた子どもたちは、大人よりも先に、謎を解き明かし次へ次へと進んでいったのはいうまでもない。本イベントでは、謎解き問題の製作者である株式会社エフェクスの宮川英俊社長も名古屋から見学に来られ、本校の図書室に並べられた謎解き本のコーナーに強く感動され「コレはすごい！謎解きイベントの事前学習になっていますねえ。」と感心されていた。当日の謎解きイベントの時間には、自らもヒント係を買って出てください、イベントを大いに盛り上げていただいた。もちろんイベント終了後も本を借りに来る子や、貸出予約中を待ちきれずに電子書籍で謎解きの本を読む子もいた。まさに紙の本と電子書籍の相乗効果で子どもたちの読書量が増えていった。



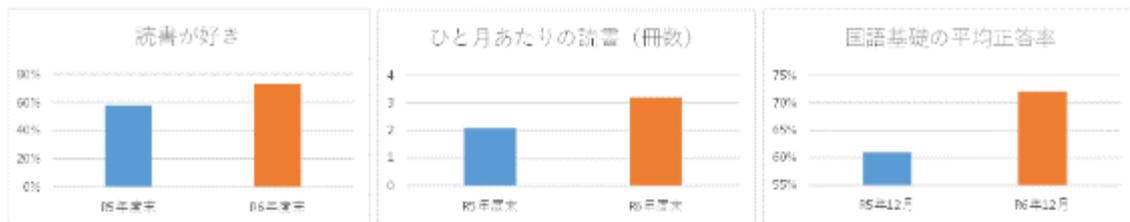
謎解き本の特設コーナー

本年度の電子書籍読み放題パック等と紙の本を併用した図書館を活用した研究授業ではパナソニック教育財団からの助成金もあり、校内研究授業でも全市向けの公開授業でも、市教委や府教委の指導主事からの指導助言だけでなく、大阪商業大学の初谷勇教授、奈良佐保短期大学の上出吉則教授、近畿大学短期学部の川原亜希世准教授らの大学の学識経験者からも指導助言をいただくことができた。もちろんこれらは、授業を担当した教員の授業力向上や自己有用感の達成に大きな効果があったのはいうまでもない。

## 5. 研究の成果

実践を進めるなかで、子どもたちに少しずつ変化が見られてきた。まずは、子どもたちの読書量は確実に増えていった。まず12月に実施した東大阪市のトライアルアンケートで「読書が好きと答える子どもたちの肯定回答の割合は前年度の58%から73%に上昇した。次に「児童の1ヶ月あたりの紙の本の平均貸し出し数」は前年度の2.1冊から3.2冊に上昇した。ちなみに残念ながら電子書籍読み放題パックの貸し出し冊数は把握できていないため、このグラフには表れてはいないが、おそらく電子書籍全体の貸し出し冊数も本年度は大きく向上しているものと推測される。最後に12月に実施した「東大阪市標準学力調査の国語基礎の平均正答率」は前年度の61%から72%に向上した。実はこの3つとも当初に設定した目標値には届いてはいないのだが、明らかに有意差を持って効果は表れていると感じている。

左から、読書が好きと答える肯定回答の割合、児童ひと月あたりの読書冊数、国語の正答率



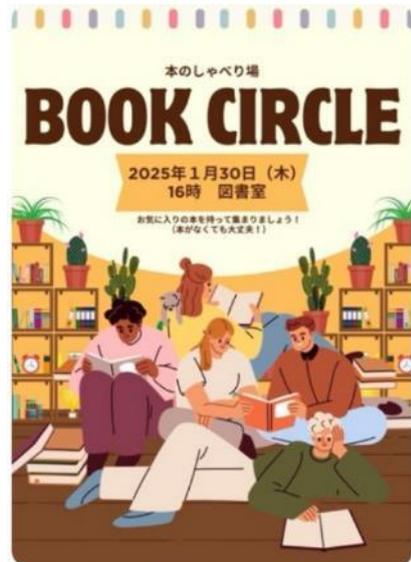
また子どもたちの変容として、次のような点があげられる。まず、**子どものタブレット活用が大きく進んだ**。本市ではドリル教材としての Qubena(キュビナ)がタブレットにインストールされ市教委からその活用を強く推奨されているが、それに加えて Kahoot!を使った読書クイズに取り組んでいくうちに、算数や国語でキュビナだけでなくカフートの問題にもタブレットに向き合って取り組む子どもが増えてきた。

さらに特筆すべき点は、**生徒指導事象が激減した**ことである。学校内外で本に親しむ習慣がつきはじめると、学校全体が落ち着いた雰囲気になり、前年度まで起こっていたいじめや不登校、子ども間の暴力行為、校内の器物損壊などの生徒指導事象が減少してきた。子どもたちの情緒の安定に読書活動は大いに効果があったと実感している。

補足だが、文頭にあげた読書活動推進によって期待できる 9 つの効果のうち、②読書を楽しむ、④つながりを深める、⑤読書意欲を高める、の 3 点についても確かな手応えを感じている。

ちなみに今回の助成で子ども向けの書籍だけでなく、朝の読書の時間に読む教員向けの書籍も購入できたので、教職員も本に親しむようになった。職員室内で読み終えた本の感想などの会話が聞こえるようになり、さらには教職員の中で自主研修として、放課後に自分の好きな本を持ち寄って意見交換する「ブックサークル」の企画も自発的に生まれた。それに伴って職員室の雰囲気が「仕事場」ではあるが、気軽に雑談が言い合える教職員の「居場所」へと変わっていった。

本実践はまだ 1 年目であるため、学力面での大きな成果が見られるまでには至っていないが、次年度以降は（取り組みは継続して行う予定であるので）必ずや学力面でも、よい数値が得られるものと全教職員が確信している。



ブックサークルの自主研修

## 6. 今後の課題・展望

今回の実践は、大阪府の研究指定やパナソニック教育財団様の助成金を得られたため、人的・経済的な支援に恵まれ、よりスムーズに進めることができた。

しかし次年度以降も、同様の支援が獲得できるかどうかはわからないが、それでも全教職員で力を合わせて、図書館の毎日開館と読書（紙の本も電子書籍も）の奨励を続けていこうと思っている。特に今回、春のスターアップセミナーの翌日に国立国会図書館を視察したが、館内の 9 割以上の蔵書は電子保存されており、入館者はパソコンで検索してモニタ上で電子書籍を閲覧するシステムになっていた。貴重な書物の保護にも繋がり、今後の学校図書館もいずれこのような方向に進んでいくだろうと感じた。

蛇足ではあるが、視察の際に自分の名前で検索をかけると、数十年前に小学館の月刊誌「総合教育技術」執筆した顔写真入りのページが現れ、少し気恥ずかしい気持ちにもなったが、自分の拙い文章が国立国会図書館に電子データとして保存していただいていることに震えるくらい感

動し、本研究の推進に校長自らが率先して進めていこうという強いエネルギーが湧いてきた。

さらに今回の研究について、東大阪市教委や大阪府教育庁から一定の評価を得られ、R7年度も引き続き、図書館の充実活用に言語活動の推進を加えた研究指定校の候補にさせていただいている。本校では研究指定に当たっても当たらなくても、本実践を次年度も継続する予定であるので、本年度の実践をまとめてぜひ R7 年 11 月 14,15 日の JAET 全国大会で実践報告をさせていただきますと計画している。

校長として本研究実践の総括役を担当した自分は教師生活 40 年、すでに還暦過ぎの老兵ではあるが、今後も少しでも若い先生方のやる気を伸ばせるような学校経営を探っていきたいと思う。

今回、このような拙い実践についても研究助成をいただいた「パナソニック教育財団」の関係者の皆様方に深く深く感謝し、本稿を終えたい。

## 7. 参考文献

- ※1 上出吉則 (2022) 「ICT のある授業づくりをとことん楽しもう」明治図書 数学教育 2022 年 1 月号 p9
- ※2 石川晋 (2013) 「教室読み聞かせ読書活動アイデア 38」明治図書
- ※3 東大阪市算数教育研究会 (2023) 『算数科における児童のタブレットの効果的活用』パナソニック教育財団研究成果報告書 [https://www.pef.or.jp/db/pdf/2023/2023\\_67.pdf](https://www.pef.or.jp/db/pdf/2023/2023_67.pdf)  
(2025 年 3 月 3 日参照)